

日曜寺子屋家族塾の取り組み 3

古川 秀明

スクールカウンセラー（以下 SC と表記）をしていて、勉強に関する家族の問題を多く扱う中で、その解決に以下の2点が必要であると思われた。

1. 親に「勉強する意味」を学んでもらい、それを子どもに伝えてもらう。
2. 子どもに勉強する楽しさを経験してもらう。

「親に勉強する意味を学んでもらい、それを子どもに伝えてもらう」

方法

保護者対象の講演会やカウンセリングで「勉強する意味」を話すと、今までそのような話を聞いたことがないという感想が多く寄せられた。

高校までの学校教育の中で「勉強する意味」を教えてくれる授業はない。大学の哲学や教育などの専門的な授業のなかでも取り上げられることは珍しい。

「勉強の意味」教える義務がある機関もない。勿論私が教える義務もない。

食うために勉強をして、資格や能力、学歴を身につける。その考え方にケチをつける必要もないし、この先もその考え方は機能するだろう。

私一人が「勉強する意味」をギャーギャー騒ぎ立てても世の中何も変わらない。

そんなことをするより、趣味の魚釣りをしているほうが楽しい。

よし決めた。勉強する意味など知らない顔して、見て見ぬ振り振りをしよう。

そのうち誰かがやってくれるだろう。

だいたい私がこれでいいと思っている「勉強の意味」も本当にそれで良いのかどうかは疑問だ。

何もしなければ誰からも批判や非難されることもない。

そのように思う反面、これでいいのだろうかと思う自分もいた。

敗戦で、焼け野原の何もない所から、ここまで這いあがってきた親世代の勉強スピリッツには説得力もあるし、物質的にここまで豊かな国にした実績もある。

だけどそのやり方で育てられる子どもや若者が、不登校や引きこもり、いじめや自殺という社会や大人に対する地味なク

一デターを起こしているようにも見える。ただ、そんな考え方も私の片寄った考え方もかもしれない。

それならばもう少し私のやり方で私の考えを人々に投げかけてみよう。

それで反応がなかったら何もしないでおこうと決めた。

そこで最初に思いついたのが講演会。

「つながりを考える」「孤独を考える」「勉強を考える」という演題で講演を始めた。

対象が大人の場合、どこの会場でも手ごたえがあった。

対象が子どもの場合、どんな反応するのだろうか・・・。

子ども達の感想を聞いてみたい

そこで、講演の対象が小学生（5、6年生）や中学生の時は、子ども達に講演の感想を書いてもらった。

学校は、講演会を授業の一環として位置付けているので子どもの感想記入について積極的に協力してもらえた。

感想は講演前と講演後に記入してもらい、講演前には孤独や勉強についての話をどう思うか？という質問に答えてもらい、講演後は講演を聞いた後の感想を書いて

もらった。その結果、小学校、中学校を問わず似たような結果になった。

講演前の感想

「わからへん」「早く終わって欲しい」「退屈そう」「なんでこんなんすんの？」

「もうええし」「はよ帰って遊びたい」「書く意味なし」「勉強嫌い」「孤独で意味不明」「手品ある？」

記入は任意にしたので、中学生では7割が未記入、2割が講演会に対する批判や非難。残りの1割が講演に少し期待している内容だったが、「どうすれば成績が上げられるのか聞きたい」といった内容がほとんどだった。

小学生では誰か一人が「わからへん」と書くと、それをみんなで写したのだと思われるが、その後10人くらいが「わからへん」ということを書いている。

つまりほとんどの子どもが勉強に関する講演会に関心がなかったのだ。

講演後の感想

小学生では、講演前の、「わからへん」「知らん」というような同じ言葉が何枚も続く感想がほとんどなくなった。

中学生では講演後の感想提出率が8割を超えた。

そして、「勉強」の話をしたのだが、その話を聞いて、家族や友達の悩みを書く子

どもが多くいた。

「勉強する意味」は自分の生活に大きく関わっていることを何となく感じてくれたようだ。

<小学校5年の女の子の感想>

「私はいつも友達から仲間はずれにされます。今もA子ちゃんとB子ちゃんにハマられ（仲間はずれにされること）てます。お母さんに言うたら、仲間はずれにされて悔しかったら、勉強で一番になって仲間はずれにした奴を地獄に落としたりてゆわはりました。そやから塾に行けて言われて塾に行ってます。けど私はA子ちゃんやB子ちゃんと仲良くなりたいたけやし、地獄には落としたくありません。今日のお話を聞いて、勉強は誰かを地獄に落とすためではないことがわかってうれしかったです」

<中学3年生男子、A君のエピソード>

A君は大変素行が悪く、地域や学校でも有名な非行少年。学年集会や行事でみんなが集まると必ず騒ぎを起こしていた。私の講演会の時も二人の屈強な教師に両脇を抱えられ、それでも「話なんかだるいんじゃ、はよ帰らせ！」とわめきちらし、その度に両脇の教師にきつく指導されていた。話の流れの中で、そんなA君に私が「君は誰かに親切にして喜ばれたことあるか？」と尋ねるとA君は「他中の奴とグループで喧嘩になった時に、ツレがやられそうになったんを助けたったんや。ほんならごつつう喜びよってな。それから俺ら親友になったんや」と得意

げに答えてくれた。A君の一言で会場は爆笑に包まれた。和やかな空気になったところで、私はA君に「そのツレに感謝された時、君はどんな気持ちになった？」と尋ねると、「そらうれしい気持ちになったに決まってるやんけ」と答えてくれた。「なんでうれしい気持ちになったん？」と尋ねると、A君はう～ん、う～んと考え出した。「ほんなら今から私がなんでうれしい気持ちになったか教えてあげるから聞いてくれるか」と言うと、A君は最後まで静かに聞いてくれた。講演の最後に「A君、最後まで静かに聞いてくれてありがとう。A君が静かに聞いてくれるという親切な行動を私にしてくれたので、私はとても助かりました」と話すと、A君は私に右手でピースサインを送ってくれ、会場みんながA君に拍手をした。後日A君の担任の先生から、「A君が30分以上みんなの中で静かに座って誰かの話を聞いたのを見て、学年の教師全員が驚きました」という話を聞いた。

私は子ども達に非行防止や健全育成や友情のことについて語ったのではない。なぜ勉強するのかを話したのである。

その勉強の話を聞いた子どもたちは勉強以外の大切なことに気づき、自分の心の中に小さな変化を起こし動き出した。

これらの感想やエピソードは「勉強する意味」の話は大人だけではなく、子どもにも伝わるものがあるということを示せてくれた。

そして、親だけではなく、子どもだけでもなく、親と子が一緒に勉強をする意味を学んだらどんなことが起こるのだろう・・・ということに興味を持った。

「親に勉強する意味を学んでもらい、それを子どもに伝えてもらう」という私の考えはいつのまにか、親と子が一緒に勉強する意味を学び、そのことを共有して、親子で勉強の意味を考えられる場を私が提供したら、何かもっと良い変化が起こるかもしれないという考えに変化していた。

(次号に続く)

